

主はできる。でも私たちは？

2007. 12. 4 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

へブル人への手紙 4章14節から16節

さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

7章25節

したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

12章1節から3節

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでください。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

近江八幡の「よろこびの集い」には、大変大勢の方々が集われたそうです。神戸、大阪、西神、そのほかあちらこちらから人々が集われたようで、主がご自分のご臨在を明らかにしてくださり、本当に恵んでくださったと思いました。

近江八幡のT姉のお母様であるO姉妹から、可愛い手紙をいただきました。あのおばあちゃんは、次のように書いたのです。「肉体は衰えてまいります私ですが、主のお召しがあるまで、御再臨があるまで、みことばは私の喜び、いのちそのものでございます」と。

そして、みことばを引用していただきました。

詩篇 119篇105節

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

〇姉妹は仙台に住んでいて、92歳です。「みことばは、わたしの喜び、いのちそのものです」と言うことができる人は、本当に幸せではないでしょうか。

「よろこびの集い」での、朝の兄弟たちの祈り会に参加したとき、どうしてかなぜかはっきり分かりませんが、嬉しくなりました。それは、みんなが本当に主によって喜び、心が一つになりましたし、更に、主を見上げたからでした。

そして、家庭集会が増えつつあるということは、本当に嬉しいことでした。京都の近くに住んでいるK兄弟とM姉妹の家で一月から家庭集会が始まるようになり、そのうえ西神集会のN姉妹も家庭集会を開くために、昨日契約を結んで、マンションを買うようになったそうです。今まで大学の近くに住んでいたのですが、これから大学までの通勤に40分かかるようになるそうです。しかし、喜んで犠牲を払うのは間違いなく祝福となります。大部分の人たちは家庭集会を通して導かれていますから、大いに喜ぶべきではないでしょうか。また名古屋でも、一月から家庭集会が開かれるようになります。

イエス様は、ご自分の教会を建てると約束してくださいました。そしてちっぽけな人間を用いようと望んでおられるということは、恵みではないでしょうか。イエス様にとって不可能なことはありません。

けれどもこのイエス様が、あるときご自分の弟子たちに言われたのです。(ちょっと信じられないことですが。)
「もし、わたしにつながっているなら、あなたがたにとって不可能なことはない。ぶどうの木とつながっている枝は、実を結ぶものになるに違いない」と。

しかし、この何でもおできになるイエス様が、あるとき困られたのです。お悩みになりました。どうしてでしょうか。それは、おできにならなかったからでした。何でもできるお方がおできにならなかったのです。マルコ伝の中で次のように書かれています。

マルコの福音書 6章1節、2節

イエスはそこを去って、郷里に行かれた。弟子たちもついて行った。安息日になったとき、会堂で教え始められた。それを聞いた多くの人々は驚いて言った。「この人は、こういうことをどこから得たのでしょうか。この人に与えられた知恵や、この人の手で行なわれるこのような力あるわざは、いったい何でしょう。」

「この人は」という言葉が四回も出てきます。(ちょっと失礼ですね。ひどいですね。)

6章3節から5節

「この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではありませんか。その妹たちも、私たちここに住んでいるではありませんか。」

こうして彼らはイエスにつまずいた。イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」それで、そこでは何一つ力あるわざを行なうことができず、少数の病人に手を置いていやされただけであった。

「力あるわざを行なうことができず…」と。何でもできるお方が、おできにならなかった…。「少数の病人に手を置いて癒されただけであった」と。しかし、これも大きな問題ではない。イエス様は少数の人々だけではなく、集まった病人たちをみな癒すおつもりだったのです。でも、おできになりませんでした。

6章6節

イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を教えて回られた。

イエス様は聞く耳を持つ人々を、必死になって探し求められたのです。

イエス様を信じる者は、主の用いられる器であるか、或いは、イエス様の働きを邪魔する者かのどちらかです。私たちがイエス様をお喜ばせしようと思うなら、イエス様に信頼することです。そうすれば、主は大いに喜んで用いてくださるに違いありません。

信頼とは、いったい何でしょうか。信頼するとは、

- ・何も見えなくても、主は近くにおられる事実を確信することです。
- ・何も聞こえなくても、主は全てのことについてご存じであるという事実を体験することです。
- ・何も感じられなくても、主に愛されている事実を味わい知ることです。
- ・何も分からなくても、主は最善を成すお方であり、また、主の導きは完全であるとする

主のみことばは真理であり、決して滅びることはないという事実を確信することです。

ただ今、ヘブル書から三箇所読んでいただきました。ヘブル書の中心となるお方は、言うまでもなくイエス様です。イエス様は天にお帰りになり、大祭司として人間一人一人のことを考えてとりなしていただくお方です。もう一度7章25節を読みましょう。

ヘブル人への手紙 7章25節

…ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

結局、私たちは近づくことが許されています。それだけではなく、イエス様ご自身が待っておられるお方です。それにも増して、主ご自身が人間に近づいてくださるのです。

「私の恵みの神は、私を迎えに来てくださる」と、詩篇の作者は喜んで告白したのです。

詩篇 59篇10節前半

私の恵みの神は、私を迎えに来てくださる。

将来、私たちは何を経験するようになるのか、今はわかりません。喜びを与える者になるのか、悲しむ者になるのか、もちろんわかりません。けれど、一つのことだけは、確信することができます。「主ご自身が迎えに来てくださる。主の再臨は近い」ということです。

主は何でもおできになるお方です。主は罪人を救うことがおできになるお方であることは明らかです。

実際生活において何か困難な問題に直面すると、人間は、「私はそれをしたい。けれど、できない」という場合が少なくないのですが、それとは反対に、イエス様にとって不可能なことはありません。イエス様は、したいと思うことを全て完全に成すことがおできになるただひとりのお方です。イエス様は現在も、完全な救いを与えることがおできになるお方です。イエス様によってのみ、あらゆる絶望、疑い、失望、苦しみが解決されるのです。

聖書を通して、私たちは罪人として生まれたこと、そして罪に対する報酬の恐ろしさを知ることができます。また、聖書を通して、主なる神の神聖さと厳しさをも知ることができます。「罪を犯したたましいは死ぬべし」と書き記されています。「すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっている」とあります。

しかし、主なる神は、そのひとり子を賜わったほどにこの世を愛してくださったのです。つまり、私たち罪人の身代わりとして、イエス様が尊い「犠牲の死」を遂げてくださいました。イエス様は、私たちの身代わりになられたのでした。義なる主は、不義なる私たち罪人のために、ご自身の永遠のいのちを与えてくださったのです。

もし、私たちがこの事実を信じ受け入れるなら、私たちはいのちを失うのではなく、「永遠のいのち」を得るのです。そして永遠の救いは、イエス様だけが私たちに与えてくださることができるのです。イエス様は、「みもとに来る者を救う。決してあなたを捨てない」と約束しておいでになります。

それにもかかわらず、なぜ今イエス様のみもとに行かないのかと、多くの人々に聞きたいのです。主なる神の右に座しておられるイエス様だけが、「唯一の救いの道」です。「誰もわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」と、「真理」であられるイエス様は言われました。イエス様は、私たちが主のみもとに行き、信じ、受け入れることを待っておられます。イエス様は、真理、正義、平和を真剣に求める者を、完全に満たしてくださるお方です。

私たちは、主イエス様がどれほど私たちを愛し、待っておられるか、本当に理解することができません。ルカ伝15章を読むと、放蕩息子の父親が、毎日息子の帰るのを待って地平線の彼方を見ていたことがわかります。そして、ぼろぼろに汚れ果てた放蕩息子が、

やつれ果てて、息も絶え絶えに戻って来た姿をはるか彼方に認めたとき、父親は急いで走り寄り、息子をしっかり抱きしめたのです。

罪の贖いを受け入れることこそ、最も大切なことではないでしょうか。主を拒むことは最も愚かなことです。主なる神に対する先入観念を捨てましょう。しっかりと根を下ろしてしまっている間違った考えも捨てましょう。人間というものは、完全に信頼することのできない、本当に不完全なものです。けれども「主」は、100%信頼することのできる完全なお方です。イエス様は今日も、誰をも完全に救うことができになります。

多くの模範的な偉い人たちが死んで灰になりましたが、彼らといえども私たち人間を助けることはできません。しかしイエス様は、よみがえられて今もご臨在なさっておられるお方です。このことこそ、私たちが最も必要としていることではないでしょうか。

イエス様は今も生きておられ、私たちのために父なる神にとりなしていただきます。イエス様は、私たちを縛りつけている重荷を全てご存じです。今、私たちが心の奥深くひそかに隠し持っているものも、過去における罪をもすべてご存じです。けれど、イエス様は私たちを訴える代わりに、釘付けられたみ手を、私たちに差しのべておられます。

イエス様だけが、自分の心を変えることができるお方であり、イエス様だけが、自分の生活を満たしてくださるお方です。またイエス様だけが、自分の困難な問題を解決することができるお方です。

聖書の中の最も大切なみことばの一つは、ソロモンが三千年前に書いたことばでしょう。
箴言 28篇13節

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。

これは素晴らしい約束です。私たちが告白するなら、隠すことをやめるなら、主はあわれんでくださるのです。つまり、罪の告白なくしては新しい生活はあり得ないということです。

しかし、「回心」という新しい生活の第一歩でとどまっているだけではいけません。それから更に成長しなければならないのです。始めは大喜びであった人、始めは悔い改めの涙を流した人。何と多くの人が、信仰の成長を忘れてしまっていることでしょう。最初の状態にとどまってしまって成長しない信者が、何と大勢いることでしょう。彼らは、新しいのちを与えられていながら成長できないのです。このことこそ、こんにち「イエス様のからだなる教会」の持つ一番大きな悩みではないでしょうか。大部分の信者が子どものような状態です。彼らはすでに大人に成長していなければならないにもかかわらず、何十年

も一年生でとどまっています。こんにち最も必要なことは、イエス様のため、また、滅びゆくたましいのために、祈りながら闘うことです。けれど、実際は残念ながら幼稚園の子どものような状態なのです。何が欠けているのでしょうか。どこに問題があるのでしょうか。

それはすなわち、「成長するための食べ物」が欠けているのです。食べ物は、成長するためにどうしても必要なものです。これは単に肉体のみならず、霊的な成長にも当てはまるのです。新しいのちが育てられ、成長しなければなりません。「新しい人」は、みことばに飢え渴いているはずです。

けれど多くの信者は病気であり、倦み疲れているあわれな状態にあります。そのような人たちの生活は、祝福ではなく失望に満ちているのです。その生活は、本当に惨めなものです。なぜもっと成長しないのでしょうか。それは餓死してしまったからです。

多数の信者は、生存するための最低の食べ物だけしか食べません。例えば、日曜日の朝だけ集会に来れば十分だと思いついでいる人は、すなわち餓死に瀕しているのです。

かなり以前のことでしたが、二人の兄弟が、毎日一時間聖書を読んでいるということを知り、非常に嬉しかったのです。

毎日聖書を読むことはなぜ大切なのでしょう。それは、人間は動物ではないからです。人間のたましいは、肉体と同じように食べ物を必要としているからです。私たちは、毎日三度の食事をとっているのに、なぜそれと同じだけ霊の糧を必要としていないのでしょうか。体のほうが、たましいよりも大切なのでしょうか。

イエス様はマタイ伝の4章4節に、一つの旧約聖書のことばを引用なさいました。

マタイの福音書 4章4節

イエスは答えて言われた。『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」

と言われました。自分はなぜこのように信仰が駄目になってしまったのか、と疑い怪しむ人がいますが、その理由は霊の糧を食べていないからです。肉体に対しても同じように、食べ物を食していなかったなら、すでに死んでいたことでしょう。新しいのちは、食物を必要とします。

この食物とは、言うまでもなく「主のみことば」そのものです。主のみことばとは、つまり霊の糧です。イエス様は、「みことばこそ必要であり、大切である」と語られました。また三千五百年前に、モーセは、イスラエルの民に向かって言ったのです。「みことばこそ汝のいのちなり」と。

申命記 32章47節前半

「これは、あなたがたにとって、むなしいことばではなく、あなたがたのいのちであるからだ。」

モーセは主のことばの大切さがよくわかっていたのです。主のみことばがなかったなら、彼はもちろん民を導くことができなかつたでしょうし、多分絶望してしまったに違いありません。

イエス様も次のように証ししてくださいました。

ヨハネの福音書 6章63節

「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです。」

「肉は何の益ももたらしません」と。人間のしていることは、全部的外れのようなものです。主のみことばを食べ、それが消化されることによって私たちが造り変え、成長させるのです。イエス様のみことばを毎日食べ、聞き従う者は、主イエスのみ姿に似た者となり、次第に性質も、歩みも、似た者となるのです。

確かに、救われるためには、聖書の知識を持たなくてもよいのです。ただ正直になり、へりくだるなら、主は恵んでくださいます。そして救ってくださいます。

しかし、成長するためには、「みことば」がどうしても必要です。悩みながら喜ぶことができるために聖書は必要です。不安、心配から解放されるために、みことばが必要です。前向きに生活するためには、みことばはどうしても必要なのです。

イエス様のご性質は、「死に至るまで献身する」ことです。「新しいいのち」の特徴は、自己決定ではなく「献身」です。

「イエス様の死」についてのみことばです。また主に従う者にとっても大切なみことばが、ヨハネ伝の12章に書かれています。

ヨハネの福音書 12章24節、25節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみこぼれです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。」

とあります。これこそ新しい生活における祝福の秘訣です。この「新しいいのち」は、主なる神によって与えられたものですから、決して自分のものではありません。ですから、私たちは、「新しいいのち」を与えてくださったお方に全てを捧げなければなりません。

献身することによって、私たちの「新しいいのち」は満ちあふれるのです。そして、主のためにいのちを捧げる者こそ、汲めども尽きせぬいのちの泉に満ちあふれるようになるのです。

新しいいのちは、「主との結びつき」にほかなりません。二つのものは一つになるのです。

すなわち、「新しいいのち」は主イエス様と結びついて一つになるのです。「いのちの交わり」は、「イエス様との交わり」です。イエス様は私たちとともにおられるだけではなく、聖霊によって「私たちの内」におられるのです。

信じる者は誰も、みことばに基づいて聖霊が内に宿っているという確信を持つことができます。エペソ書の1章13節を読むと、パウロはエペソにいる兄弟姉妹に、次のように書き記しています。

エペソ人への手紙 1章13節

またあなたがたも、キリストにあって、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。

他の箇所を読むと、これこそ聖霊によるバプテスマです。水の洗礼と関係のないものです。「聖霊によるバプテスマ」を通して人間は救われます。いわゆる水のバプテスマは救いと関係のないことです。すでに救われたことを公に証しするための手段に過ぎません。

ヨハネ伝15章4節。成長のために、イエス様の言われた秘訣です。

ヨハネの福音書 15章4節

「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。」

枝がぶどうの木につながってなくても、成功するかもしれません。しかし、「永遠なる実」は残りません。これこそ、成長と実を結ぶことの秘訣です。「イエス様と私」すなわち、二つの人格が一つになることなのです。神の御子すなわち勝利者。いのち、光、力であるイエス様は、あなたと一つになることを望んでおられます。主イエス様は聖霊によって信じる者のうちに宿られ、信じる者と共同の生活をなさりたいと望んでおられます。

「イエス様とあなた」。これは現在のためにも、将来のためにも必要かつ十分です。私たちのうちにおられるイエス様は、いかなる状態においても満ち足りておられます。私たちはイエス様によってすべてが満たされており、あらゆる問題が解決されています。イエス様の知恵と力は、いかなる悩みや苦しみの時にも十分な満たしの源です。そしてイエス様の愛は、完全な満足を与えてくださいます。

私たちは、イエス様にあつて完全な満足を見出すか、または、絶対に満たされることがないかのどちらかです。イエス様を持っている者は、すべてを持っているのです。人間が与えるものはいかに素晴らしいものであったとしても、イエス様の提供された贈り物と比べると全く色あせたものとなってしまいます。イエス様を持っている者は、この世が提供するいかなるものをも必要としません。イエス様の中に、尊い本物の神髄を見出した者は、

この世の提供する偽の神髄には目もくれないのです。これこそパウロの経験でした。彼はガラテヤ書6章14節で、この事実について次のように証しましたのです。

ガラテヤ人への手紙 6章14節

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

私たちのうちにおられるイエス様は、決して消極的なお方ではありません。イエス様は私たちを新しくしてくださると約束されましたので、必ずそうしてくださるのです。

イエス様が私たちの心の中に入られたとき、私たちの心の中は、きれいに掃除された神の宮ではなく、「強盗の巣」のように荒らされていました。つまり私たちは、自分自身のできよめることができなかつたのです。エレミヤは、この事実について次のように書いたのです。

エレミヤ書 13章23節

クシュ人がその皮膚を、ひょうがその斑点を、変えることができようか。もしできたら、悪に慣れたあなたがたでも、善を行なうことができるだろう。

と。(もちろんできません。)それと同じように、私たちも自分の心を自分の力できよくすることはできませんが、イエス様はおできになります。イエス様が私たちのうちにおられると、その血によって、絶えず私たちをきよめてくださるのです。

ヨハネ第一の手紙1章7節、みなさん暗記しているみことばです。素晴らしいことばです。救われていない人々にではなく、信じる者のために書かれたことばです。

ヨハネの手紙・第一 1章7節

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

イエス様の血によってきよめられた者は、新しい者です。私たちがきよめられる目的は、「主の栄光をほめたたえる者」となるためです。エペソにいる兄弟姉妹に、パウロはこの事実について次のように書いたのです。

エペソ人への手紙 1章12節

それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえる者となるためです。

かつては主に敵対する者であり、罪人であり、悪魔の奴隷であった私たちが、「イエス様の血」によって新しく造り変えられたのです。すなわち、「主の栄光をほめたたえる者」とされたのです。

私たちの人生の目的とはいったい何でしょうか。

いわゆる幸せか、或いは、金か、名誉か、愛情でしょうか。そうだとすると、私たちの人生の目的は全く低いものとなってしまおうでしょう。

主なる神の愛と知恵は、私たちのために、はるかに高い目的を備えてくださいました。私たちは、「主なる神をほめたたえる者」となるべきです。

ヨハネはその第一の手紙の中で、次のように当時の信じる者を励ますために書きました。
ヨハネの手紙・第一 3章2節

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。

そのとき、初めて次のように大きな声で賛美することができるのではないのでしょうか。黙示録に書かれています。

ヨハネの黙示録 5章12節

「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」

私たち人間は、私の人生のために計画してくださっている神のご目的を、受け入れようではありませんか。

私たちの人生は今、主に喜ばれているのでしょうか。もしそれを望むなら、自分の全生涯を、自分のために十字架に釘づけられたイエス様のみ手の中に明け渡しましょう。主は私たちの生涯において、必ずご目的を達成なさることがお出来になるということを信じましょう。

私たちの「信頼」は、イエス様をお喜ばせする唯一のものです。私たちの「信頼」は、私たちがイエス様に対して表わすことのできる唯一の栄光と誉れなのです。

イエス様は、ご自身を私たちに提供しておられます。イエス様は、「わたしのもとに来なさい。わたしはあなたを新しいものにする」と語っておられます。私たちの答えは、いかなるもののでしょうか。

もし、誰かが電話で何かを求めたとき、私たちはそれに答えなければなりません。お客様のご訪問を受けた時、私はそのお客様に挨拶をする義務があります。誰かから依頼の手紙をもらったとき、私たちはそれに対する返事を書かなければなりません。そのようなことは礼儀として当然のことであり、また、相手に対し関心を持っているなら答えることでしょう。

イエス様も、私たちのはっきりとした答えを望んでおられます。

マタイの福音書 27章22節

ピラトは彼らに言った。「では、キリストと言われているイエスを私はどのようにしようか。」彼らはいっせいに言った。「十字架につける。」

私たちはいかなる答えをするのでしょうか。

私たちが主なる神と正しい関係に入ることを、主が望んでおられます。金、努力、手柄などは要求されていません。主が人間の滅びゆく状態について語っておられること、イエス様が私たちの救いと解放のためにしてくださったことを信じなければなりません。

ヨハネは、

ヨハネの手紙・第一 5章10節から13節

神の御子を信じる者は、このあかしを自分の心の中に持っています。神を信じない者は、神を偽り者とするのです。神が御子についてあかしされたことを信じないからです。そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。

と。

主のみわざに対する私たちの答えは、いかなるもののでしょうか。

今日みことばを聞いた人は、心をかたくなにはなりません。イエス様の招きに素直に応じてください。ためらわずに、今すぐイエス様の招きに従ってください。「喜べ。立て。主イエスがお前を呼んでいる」。

イエス様を知るためだけでなく、「イエス様との親しい交わりを得るため」です。

了